国際スポーツイベントのレガシーに関する研究： 2009台湾・高雄ワールドゲームズを事例に

スポーツビジネス研究領域

5010A095-1 李 芝菁

研究指導教員：原田 宗彦 教授

【緒言】

現代のスポーツイベントには、「経済効果」や「都市開発」といった新しいキーワードが付随している。多くのスポーツツーリストを呼び込んで消費を活性化し、スタジアムやアリーナの建設によって都市インフラを整備する「カタリスト」としての効果期待される(原田、2002)。しかしながら近年では、そういった「イベント効果論」に疑問の声が上がり始めている。現行のイベントの経済的効果の算出手法には誤りが多く存在するとCrompton (1995)が指摘した。なお、イベントの経済効果以外の効果、いわゆる「社会的効果」に関する研究や検証の事例数は限られているとChalkeyら(2001)が述べている。イベント効果について評価・検証の視点を「経済的効果」から徐々に「社会的効果」に変えていくという潮流を受け、近年において提起・注目されつつあるのは、「レガシー」といった概念である。原田(2002)は、イベントが(一過性の)経済効果をどの程度都市にもたらしたかということではなく、イベントが残した様々なレガシー(遺産)をポジティブな影響に転化する試みであり、それを有用な財産として蓄積し有効活用するという、ポストイベントに関わる戦略であると述べている。IOC(国際オリンピック委員会)は本世紀に入ってからオリンピック・レガシーといった命題に重点を置いたようになり、2002年に「The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000」をテーマにシンポジウムを開くことにより過去のオリンピック・レガシーを系統的に整理し始めた同時に、オリンピック開催都市に対しても、国・地域にレガシーを残すように取り組むことを求め始める。しかしイベントレガシーに関する事例研究の量は極めて少ない。そういった現状を打開するには、スポーツイベントを評価・検証する視点をレガシーに重点を置き、操作的定義と研究範囲を決めた上、より多くのスポーツイベントを事例に研究に取り組む必要があると考えられる。そういった必要性を背景として、本研究で取り上げられた研究事例は2009年台湾・高雄市に行われた第8回ワールドゲームズである。国際的に認知度と知名度が低く、国内において伝統産業を基礎とする工業都市のイメージ

が強かった高雄は近年、都市の「路線転換」を図り、都市中心部景観の再造、地下鉄の建設、観光資源の整備、文化行事の積極的開催など都市再生へ向けて様々な施策に取り組むようになり、その施策の一部として2009ワールドゲームズを誘致する運びとなった。その都市再生に2009WGがどのように寄与したかについて我々は注目すべきである。

【研究目的】

本研究の目的は(1) スポーツイベントのレガシーの定義を明確化し、その定義を用いて、2009WGを都市再生の一つのカタリストとして捉えた上、イベントが開催都市(高雄市)にもたらすレガシーの具体的構成要素を検証すること(2) それらのレガシーが地域発展・活性化に持続的に寄与しているかを検証し、さらにレガシーの存続に関する課題を見出し、国際スポーツイベントの開催都市が取り組むべきポストイベント戦略を検討すること。

【先行研究の検討】

海外では、就職機会の増加(Ap and Crompton, 1998)、生活水準の向上(Getz, 1997)、経済成長向上への働き(Mihalik and Cummings, 1995)、公共施設の整備(Mihalik and Simonette, 1998)、税収の増加(Andriotis and Vaughan, 2003)、外来投資の増加(Ap and Crompton, 1999)など、スポーツイベントの経済効果を個別的側面から分析する研究がたくさん存在している。しかし、レガシーに関する研究は極めて少ないのである。Kang(2006)は、レガシーはスポーツイベントの多様な効果(diverse impacts)に近い概念と指摘している。またCashman(2006)は、「レガシーとはフィックス(決められた)されたものではなく、動的で進化的なものである」と述べている。さらにPreuss(2007)は、スポーツイベントのレガシーを「イベントが都市にもたらす様々な構造的変革による持続的効果」と定義している。Kang(2006)が(1) イベント後も持続的に存在する、(2) イベントの開催がない限り発生しないもの、と述べている。これに基づき、本研究はイベントレガシーを「イベント開催に投入された

資源（ヒト・モノ・カネ）によって発生する、開催後に長期的・持続的に地域に存在する様々な影響と効果」と定義したいと考える。

【研究方法】

本研究は(1)専門家インタビューよりデータを取集し、(2)質的データのために開発された SCAT 法により分析を行った。Kang(2006)の研究よりインタビューガイドを作成し、予備調査を 2011 年 9 月 13 日に行った。予備調査で 2009WG のレガシーを構成する (1) 施設 (2) 知識・ノウハウ (3) 人的資源 (4) 政策・制度 (5) スピリット (6) 国際的認知・印象、6 つのカテゴリーを抽出した。これらのカテゴリーを基づき、さらに (1) レガシーの具体的構成要素 (2) 存続における課題 (3) ポストイベント戦略について本調査で調査する。本調査は 2011 年 10 月 28 日～11 月 8 日に行われた。インタビューは、ワールドゲームズに知見を持つ学者などがリストアップされた。

性別	役職	面接時間
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師 (2009WG で競技マネジメントを担当)	33 分
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部助教授	28 分
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部准教授	42 分
男	K 都市発展財団理事長	38 分
男	Y 大学公共政策学部講師	45 分
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師 (2009WG で運営総括を担当)	63 分
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師	35 分
男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部教授	45 分
男	高雄地下鉄株式会社取締役代表	25 分
男	N 大学レジャー産業経営学部教授	23 分

【調査結果】

◎ レガシーの具体的構成要素

(1) グリーン・メインスタジアム（施設）、(2) ボランティア・バンク（人的資源）、(3) 大型イベントの SOP（知識・ノウハウ）、(4) 中小規模国際スポーツイベントと単一種目国際大会を中心に誘致するビジョンの確立（政策・制度）、(5) 住民の高い連帯感（スピリット）、(6) 国際スポーツ界における高雄の知名度の向上（国際的認知・印象）などの具体的レガシーが残された。

◎ レガシーの存続における課題

(1) メインスタジアムなどの施設のさらなる活用・効率的運営に立ち向かう厳しい現状、(2) 運用されていない知識・ノウハウ、(3) 確実に存在しているが整合の取組みが見られていない人的資源、(4) ビジョンはあるが具体化まで時間がどれほどかかるかまだ不透明なスポーツ施策変革、(5) 無形のレガシーであるためプロモートと保存が困難なスピリットと (6) 国際的認知・印象、などを挙げるができる。

◎ ポストイベント戦略

(1) 外部委託制度（指定管理者制度と類似）により第三セクターや民間会社で施設運営、(2) 「2009 ワールドゲームズ経験伝承講座」の開催、(3) ボランティアを有効活用できる「ボランティア・バンク」の立ち上げ、(4) 地域に密着する、定期的なイベント（スポーツ・芸術・アート・民俗行事など）を年間を通じて開催、(5) WG の開催成果をまとめたレポートを国際スポーツ関係者に配布、イベント開催の実力をアピールなどが挙げられた。

【考察】

施設・人的資源・制度など具体的なレガシーが残されたが、都市再生・地域活性化に寄与できる 2009WG のレガシーは限られている。また、誘致・準備段階でレガシー・プランが確立されなかったため、2009WG のレガシーは計画的に形成されたものではない。レガシーを活用し、存続させるポストイベント戦略も系統的に構築されていない（非計画的レガシー）。スポーツイベントの主催側は、誘致段階からレガシー・プランを明確的に打ち出し、ポストイベント戦略を含める全体的ビジョンを示すべきであると提言したい。

しかし 2009WG は、スポーツイベントを誘致・開催する際、地方都市の今後の 1 つの方向性を示したと考えられる。2009WG の経験により、新たな施設を作らず（もしくは臨時的施設で開催）、現有資源・施設を最大限に活かすという「都市の身の丈に合った」イベント誘致・開催が提唱される中、高雄市の行政側では、今後は①単一種目国際大会、②比較的中小規模な大会を誘致する方向性が確立。世界中の「スポーツイベント誘致合戦」における地方都市と「スポーツ途上都市」の可能な方向性を示唆したと考えられる。